OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	更年期女性のQuality of lifeに関する研究 : 中年女性の健康プロジェクトに向けて
Author(s)	佐藤, 珠美
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1012
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏名	佐藤珠美
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学位記番号	第 19372 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	更年期女性のQuality of lifeに関する研究－中年女性の健康プロジェクトに向けて－
論文審査委員	（主査） 教授 大橋 一友 （副査） 教授 阿曽 洋子　教授 藤原千恵子

論文内容の要旨

〔目的〕

更年期障害は女性のQOL（Quality of Life）を著しく低下させるが、わが国ではかなりの女性が更年期は自然な過程と考え、症状を我慢することが多い。更年期の研究の多くは病院を訪れる患者を対象としている。医療機関を受診する女性とそうでない女性では、症状の頻度、健康問題、社会経済的情況などあらゆる面で異なる。そのため、臨床での調査結果を更年期女性の経験として一般化はできず、ヘルスプロモーションのデータとしては慎重に取り扱う必要がある。

本研究では、

1．閉経後の女性の更年期体験を時代背景との関連において検討する。
2．健康な中年女性の健康関連QOLを調べ、QOLに対する閉経の影響を明らかにする。
3．医療機関を受診していない女性を対象に、更年期の問題解決のためにディスカッション・グループが有効であるか検証を行う。

以上より今後の支援方法の構築を目指すことを目的とした。

〔方法と結果〕

研究1．閉経後の女性の更年期体験にみられる時代背景の影響

2つの農・漁業地区に居住する閉経後の女性27名（A地区：14名、B地区：13名）を対象に、それぞれ2回に分けて半構成式集団面接を行った。面接前に、個別に基本属性（年齢、閉経状況と閉経年齢、閉経前後の体調など）について質問した。その後、「あなたの更年期の体験について話してください。」というOpen-endedの質問より面接に入った。面接内容は逐語録とし、KJ法を用いて分析した。対象の平均年齢は68.8歳であった。更年期を意識しなかった人は23名（85%）、このうち12名（52%）が閉経前後に頭痛、肩こり、ほてりなどの症状を体験したが、これを更年期障害と結びつけることはなかった。更年期体験として「更年期の自覚」、「閉経の自覚」「老いの意識」が得られた。更年期体験には、「閉経と更年期の認識」、「閉経・更年期情報」、「休養することの難しさ」、「更年期イメージ」、「医師の対応」、「更年期の性と生殖」、「月経の体験」、「女性向けの健康教育」、「家族と生

活」、「地域、社会状況」が影響していることが明らかになった。

研究２．健康な中年女性の Quality of Life に関する調査　－WHO/QOL-26 尺度を利用して－

45～55 歳の女性で、広報などをみて応募した 187 名に目的を説明し、同意を得た人に質問紙調査（Kupperman Menopausal index；KKSI、WHO/QOL-26 他）と採血を実施した。合併症を有するものと月経状況と血清 E_2 の不一致者などを除いた 153 名を分析対象とし、月経状況と血清 E_2 によって、pre-menopause、peri-menopause、post-menopause の３群に分けて検討した。

KKSI スコアは peri が３群中最も高く pre との間に有意差があった。QOL スコアは３群間で差がなかった。健康であるのにも関わらず peri、post の女性の 25%が中等症または重症の更年期症状を経験していた。114 名（69%）が更年期症状による日常生活の支障を感じていた。peri、post の女性の QOL 低下は、更年期障害の重症度と有意な負の相関があった。対象の多くは医療機関を受診していないが、健康教育や更年期障害で悩む人同士の会などのヘルスケアサービスを求めていた。地域には更年期障害に対する援助を必要としている人がかなり存在することが明らかになった。

研究３．更年期女性の健康の維持増進・QOL の向上を目指した地域における看護介入の取組み

広募した 40～55 歳の女性で、研究に同意が得られた８名を２グループに分け、週１回、２時間、５回ずつのディスカッション・グループ（以下 DG とする）を実施した。WHO/QOL-26 と KKSI を使用し、介入開始前、介入開始から５週間後、10 週間後に評価した。介入による変化の自己評価も行った。KKSI と WHO/QOL-26 では、DG による介入の効果を短期間で評価することはできなかったが、質的データから更年期障害の悩みを持つ女性たちにとって、DG は新たな知識や情報を入手する場、仲間との共感や分かち合いの場になるだけでなく、アサーション・トレーニングの場としての有用性が示された。そのことから、長期的には QOL の向上が期待できると思われる。

〔総括〕

更年期体験には、閉経や更年期障害に関する情報の量と質、閉経に対する社会文化的な見方、更年期の女性の健康に対する医学的関心、勤労意識と道徳観、夫婦関係、保健医療の利用環境、社会・経済状況などの要因が関連していることが明らかになった。このことから、更年期障害に悩む女性の QOL を高めるには、身体、心理社会面を含めた全人的なケアが必要であることが示された。

次ぎに、地域で実施した調査で、健康な女性のなかに中等症および重症の更年期障害の人が 25%存在し、QOL も低下していることが明らかになった。これらの人の多くは医療機関の受診や相談を行なっていなかったが、更年期障害で悩む人同士の会などを求めていた。そこで、更年期障害で悩む人に DG による介入効果について検討した結果、有用性が示された。今後、研究を継続し、DG の対象人数や開催数を増すとともに、他の地区でも同様の効果がみられるか検証し、更年期女性の健康支援策の１つとして確立していきたい。

論文審査の結果の要旨

更年期の女性は身体的や社会的に大きな変化に直面する。しかし、更年期の変化に対する社会的な認識は時代によって異なり、女性の対処法も多種多様である。従来の更年期女性の健康問題に関連する研究は医療機関を受診した女性を中心に行われており、現在行われているケアも同様の対象者に行われている。一方で、医療機関を受診しない更年期女性の健康状態については不明の点が多い。本研究ではこれらの女性の健康状態を明らかにすると同時に、医療機関を受診することを希望しない更年期女性が自ら健康を管理できるよう支援することを目的とする。

本研究は３部で構成されている。第１部では更年期女性の健康問題を時代背景との関連から考察した。第２部では医療機関を受診していない中年女性の Quality of life（QOL）を更年期障害との関連から検討した。第３部では更年期女性の健康問題の解決を図るためにディスカッショングループを形成した。

閉経後の女性からの面接調査では、女性の更年期体験には社会状況が影響しており、時代背景に応じた更年期対策が必要であることが確認された。次いで現在、健康対策の領域外になっている医療機関を受診していない中年女性の健康関連 QOL を WHO/QOL-26 で、また更年期障害をクッパーマン指数で調査し、以下の結果を得た。①月経の状態（pre-menopausal、peri-menopausal、post-menopausal period）で QOL に差はない。②peri-および post-menopausal period の女性の 1/4 は中等度以上の更年期障害を有しており、更年期障害の重症化は QOL の低下を招いていた。③ヘルスケアサービスに期待することとして、更年期障害に関連する知識や情報の提供以外にディスカッショングループの形成が挙げられていた。そこで医療機関に受診していない更年期女性に対するディスカッショングループを地方自治体との協力で形成した。このディスカッショシグループの形成の中で WHO/QOL-26 スコアおよびクッパーマン指数による参加者の評価は、効率のよいグループ形成に有用であった。

本研究は更年期女性に対するディスカッショングループを形成するに当たっての基礎的な検討ならびにその結果を用いた実践を行っており、独創的かつ社会的重要性の高い研究と考えられる。

以上から本論文は博士（保健学）の学位授与に値すると考えられる。